バカとヒーローと召喚獣

黒黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとヒーローと召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ９１７８Ｏ

【作者名】
黒黒

【あらすじ】
道に迷い、色んな困っている人を助けていく、そんな人物が文月学園に居る！
喧嘩が強く、頭も良い。
どんな問題が起きてもブーメランで解決だ！！
けど不幸体質のせいでＦクラスに！？
これはバカテスの中でそんな少し抜けているヒーローがＦクラスでバカをやるお話です。

プロローグ（前書き）

作者の自己満足。
キャラがぶれる、かも？
オリ主。
そんなの嫌だ～～～～～！！
て、方は読まない方がよろしいかと。

プロローグ

プロローグ

ｓｉｄｅ？？？

今俺が見ている時計は７時３０分を指している。

「よし、そろそろ出るか！！」

あ、その前にお線香だけあげとくか。

「父さん、母さん。ついに俺も二年生だ。あの時の事件から６年間も経ったんだな。」

俺の父さんたちは俺が５年生の時に交通事故で死んだ。

今は、一人では少し広い家に一人暮らしだ。

「おっと！もう行かないとな。・・・行ってきます。」

さて、シリアスムードは置いといて、学校行きますか！！

今日はクラス振り分け試験だ！！

しかし、この主人公はすこぶる運が悪いのだ。某１０万３０００冊の少女に振り回される異能殺しの主人公並みに・・・

しかも方向音痴というのもプラスされて

ｓｉｄｅ明久

今日は振り分け試験当日だ！

今は雄二と美波と登校している。

「よーし、明久。テスト前の小手調べだ！
えーと、『三権分立』は『司法』と『立法』ともう一つは何で成り立つか？」

雄二が単語帳から問題を出してきた。
まったく、雄二ってば僕を馬鹿だと思ってるんじゃないか？
ココは一つ華麗に決めさせてもらおうか、雄二！！

「ふ・・・・あまり僕を見くびらないでくれよ、雄二・・・・・・・・・・二つまでは絞れる」

「ほう」（二つ・・・？）

「『憲法』か、『漢方』のどっちかだったはず・・・・」キュピ～ン

ふふふ、決まったね。

side雄二
「『憲法』か、『漢方』のどっちかだったはず・・・・」キュピ～ン

解ってはいたが相変わらずの馬鹿だな。
なにがキュピ～ン、だ。
バカだバカだ思っていたけど、まったく予想を裏切らずこんなバカな解答を答えてくれるなんてな、こんなだからバカの代名詞「観察処分者」なんていうバカげた称号を手に入れるんだ。このバカめ・・・・このバカめ！！！
大事なことなのでしつこくもう一度、このバカめ！！！！！
しかもなんかキラキラした顔でこっちを見てくるし、それよりどう

するか翔子の事。
このままだと俺の命が危ないよな・・・・
つーか明久。こっち見んな！

「・・・・・『行政』だ。」

「あ　それじゃ、ウチからも～！
では基礎問題！『ＣＨ３ＣＯＯＨ』とは何でしょう？」
あ～バカ、島田、こいつがそんな問題解る訳ね～だろ。

「・・・・・・」

ほら顔色が悪くなってきた。

「・・・・・・」ぷいっ

「吉井？」

「・・・・・英語は苦手なんだ。」

・・・バカだ。

「え・・・・・？　これは英語じゃなくて化学」

「じゃあ僕こっちだから！」

逃げたな。

「ちょ、ちょっと吉井！あんた相当ヤバイんじゃ！？」

む、今こっち向いたのは秀吉か。
・・・そう言えばムッツリーニも見かけたな。相当前だったからもう教室の中だろうけど。
あれ、あいつをまだ見てねえな。

「おい、島田。涼斗見かけたか？」

「へ？さあ、見てないけど」

ふむ、おかしいなあいつは意外と目立つからすぐに解ると思ったんだが。

「また何時ものじゃない？」

「ああ、そうか。なるほど」

また道に迷って厄介事に巻き込まれてんのか。
こりゃあいつ間に合わね～な。

ｓｉｄｅ涼斗
「なんで何時もこーなるんだ！！！」

くっそ～、余裕を持って出たと思ってたら時計が壊れてたし。
しかも走れば間に会うっつ～のにチンピラに絡まれてる女の子が居るし。
しかも助けて走り出したら反対方向に走ってるし。
あ～！！もう、ココどこだ！！早く行かなきゃ成らんのに！
そう言えば助けた女の子も文月の制服着ていた気がする。
あ～、道を聞いておけば良かった～！！！・・・そういえば秀吉に

似てたような？
ドッペるゲンガーって奴か！？
しかもその後迷子の子見つけるしおばあちゃんが大きい荷物所って辛そうに歩いてるし。
くっそ～！！！
はっ！？ココは商店街！！まったく反対方向だと！？

「あら、涼くん。また迷ったんかい？」

「あ、ども。八百屋のおばちゃん」

「お～う、涼！！また迷ったって？お前もバカだなあ！！

「こないだ助けてくれてありがとね？」

「おい、涼！遅刻になるぞ学校はあっちだ！！」

ううう、恥ずかしい！
ここはさっさと行くか！

「じゃあ、俺行って来るから！！」

「「「「「いってらしゃい！」」」」」

いや～、相変わらず優しい人達だ。今度多めに買おう。
ってそんな場合じゃない！！

「ふうおおおおおおお！！！いっそっげ～～～～～～～～！！！！！」

ｓｉｄｅ明久
これが難しいと噂の振り分け試験か・・・・・
確かに難しいけど、問題ない・・・・この程度なら

十問に一問は、解ける！

二十点は堅いな。

ガタン！！

へ！？後ろから倒れるような音が！

「姫路さんッ！」

大変だ！

「試験中での退席は・・・」

「遅れましたあああああああああああ！！！！！」

「なっ！？涼！！」

「試験中での退席、および試験途中での参加は『無得点』扱いとなるが
それでいいかね？姫路さん。」

「ノオオオオオオオ！！やっぱだめかあああああ！！」

「ちょ　ちょっと先生、涼は別に良いとして
具合が悪くなって退席するだけでそれは酷いじゃないですか！」
涼はどうせ何時もの事だから良いとしても姫路さんはしょうがない
筈だ！！

「ちょっ、ひどくね！？」

この出来事から、僕たちの戦争の日々は始まっていくのだった。

「ちょ、俺の立場はどうなんの！？」

プロローグ（後書き）

次回、主人公の紹介

主人公紹介＋第一問「最悪クラス！？」

名前：藤橋　涼斗　（フジバシ　リョウト）明久達からは「涼」（リョウ）と呼ばれている。
身長：１７９ｃｍ
特技：ブーメラン・料理　ｅｔｃ．．．
好きなもの：甘い物・ゲーム・睡眠
嫌いなもの：辛い物・苦い物・友達に危害を加える者・自分の睡眠を妨害する者
外観：髪は黒でそこまで長くは無い。顔は意外と美形で、少し筋肉質。

補足：自分では解っていないけれど意外と有名人。迷子になりやすい・人助けを沢山している・ブーメランで全て片付ける
以上のことから着けられた通り名が【迷子ヒーロー】【特攻ブーメラン】など

運動神経も良くて成績も上々。
喧嘩を売られたら５００倍返し！！がモットーな人。ちなみに恩は５倍返し。

両親ともに亡くなっていて、家には一人で住んでいる。
家に作りは一軒家で、喫茶店をやっている。
今は店の名義は叔父の物に成っていて何とかつぶれていない、両親が残したものだから守ろうとしている。

色んな頼みごとを受けていて、大抵の物はそろえられると言うたまに怪しい所もある。
本人曰く、「出所は秘密、嗅ぎ回るんだったら５００倍返し！」だ

そうだ。

一応明久たちとは1年のころから仲が良い。

召喚獣：自分の背丈位のブーメランを持っていて、額にゴーグル、緑色のジャケット、と言う点数の割には軽装備。

本作品の主人公はこんな感じに成っています。

では本編～

第一問「最悪クラス！？」

『問・調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路　瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であると言う点。

合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

藤橋　涼斗の答え

『問題点・・・マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応する為危険。
合金の例・・・ピクミ　ジュラルミン』

教師のコメント
何を書こうとしたんですか？あなたはネタに回らなければちゃんと点数を取れているので頑張ってください。・・・・先生もそのゲーム好きです。

土屋　康太の答え
『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント
そこは問題じゃありません。

吉井　明久の答え
『合金の例・・・未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント
すごく強いと言われても。

ｓｉｄｅ明久
僕は今学校へ歩いている。
こりゃ遅刻かな～。
「お～すっ！明久」

「あ、涼じゃないか。おはよう・・・珍しく迷わなかったんだね？」

「何言ってんだよ。俺がいつ迷ったんだ？」

「あ、じゃあやっぱりこないだの振り分け試験の時は何か事情があって」

・・・あれ、なんか目を合わしてくれないぞ？

「やっぱり迷ったんじゃないか。」

「くっそ！今年こそはこの方向音痴を直してみせる！！」

「自覚があるのに直らないって案外すごいよね？」

「藤橋、吉井、遅刻だぞ。」

うげっ！？この声は！

そこに居たのは浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマンな体付きをした人が居た。

「おはようございます。すいません、ちょっと、あの、すいません。」

「ああ、お前は聞いている。さっき感謝の電話が来ていたぞ。しかし、なぜ学校とまるっきし違う方向からの連絡が来るんだ？」

あ、なんか涼が縮こまってる。

そうとう認めたくないんだな、自分が迷ったの。

「まあまあ、鉄じ――――じゃなくて、西村先生。涼も謝ってるし良いじゃないですか。」

仕方ないからフォローを入れたけど、危ない危ない。鉄人って言いそうになっちゃったよ。

そんな事言ったら生活指導の鬼コト西村教諭に目をつけられてロクな目にあわない。

「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ、気のせいですよ」

「ん、そうか？」

ふ～、危ない危ない。何とか誤魔化せたかな？

「まあいい、ほら、二人とも受け取れ」

先生が二枚の封筒を差し出してくる。

片方は僕の名前、片方は涼の物だ。

「まあ、俺は試験受けられなかったから必然的に解ってしまうんだが。」

「すまんな。お前はいい生徒なんだが。あんな所に入れるのはもったいない位。」

「いえいえ、俺と同じような人も居るわけですし。気にしませんよ。」

「むう、すまんなあ。本来ならAクラス並みの実力を持っているのに、1年間だけだからがんばってくれ。まあ、お前もお前で吉井たちと問題を起こしているんだがな？」

「すいません。」

「それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか？
掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいのに」

こうやっていちいち全員に所属クラスを書いた紙を渡すなんて、面倒なだけだと思うけど。
ご丁寧に一枚一枚封筒に入れてあるし。

「少し考えればわかることだろ？」

「へ？どう言う事？」

「ここはただでさえ世界的に見ても注目されている所だ。最先端の技術を取り入れている学校だしな。
この変わったやり方もその一環ってコトなんだろうよ。」

「まあそう言う事だ。」

「ふーん。そういうもんですかね」

さてさて、僕はどこのクラスだろうか。男のプライドにかけてFクラスだけは避けたい所だよな。

「吉井、今だから言うがな。」

「はい、なんですか？」

結構頑丈に糊付けされてるな。えいっ！このっ！！うまく開かないぞ？

「俺はお前を去年一年見て、『もしかすると吉井はバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いていたんだ」

「それは大いなる間違いですね。」

「そうですよ。何を今更そんな解りきったことを。」

「ってちょっと！？酷いよ！！自分が試験受けられなかったからって！まったく」

自分で言うのもなんだけど、今回の振り分け試験は、あまり勉強しなかったのに良い出来だった。

確かに涼程じゃないかも知れないけれど、きっと今回のことで鉄人は僕の事を見直したって言いたいんだろう。

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気がついたよ。」

「そう言ってもらえると嬉しいです。」

「・・・そうか、とことん上げてからスパイクの如く叩き落すつもりなんだな。」

なんか涼が言っているけど気にしないでおこう。

それにしてもやっぱり開かないな。
仕方ない。上の部分を破くか。
さて、僕はどこのクラスだろう。Dクラスだろうか。それともCクラス？

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった」

「だから何を今更。」

涼がまたなんか言っているな。さてどこかな？

『吉井明久・・・Fクラス』

「明久はバカです。」
「お前はバカだ。」

こうして僕たちの最低クラス生活が幕を上げた。

主人公紹介＋第一問「最悪クラス！？」（後書き）

こんな感じです。如何だったでしょう。
これからも読んで頂けると嬉しいです。

第二問「差が有りずぎる設備」

【問　以下の意味をもつことわざを答えなさい。】
『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』
『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路　瑞樹の答え
『（1）弘法も筆の誤り』
『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント
正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋　康太の答え
『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント
シュールな光景ですね。

吉井　明久の答え
『（2）泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント
君は鬼ですか。

藤橋　涼斗の答え
『（1）明久のまともな回答』
『（2）弱り目に祟り目』

教師のコメント
（2）はまだしも（1）はどう言う事ですか？
追伸：あんな清々しい間違えが出来るんだから、正解はある意味間違いだと思います。

・・・無性に正解にしたくなりました。

---

side明久
僕たちは校舎の中に入ってはじめに馬鹿でかい教室を見つけた。

「・・・なんだろう、この教室」

「Aクラスなんだろうな・・・・
ノートパソコンに個人エアコン、冷蔵庫とリクライニングシート
etc・・・etc・・・
ふーむ、見た感じだけでも数百万ぐらいするんじゃねーか？」

あはははは、それだけあれば僕の生活が一変するよ、畜生！！
ん、どこからか紅茶の匂いがしてくる。早速支給された物を入れているんだろう。

「む、この香り、アッサムか。つ～か、あれは！？最高級の茶葉じ

ゃねえか！！！
何つ～贅沢を！ああ！？そんな早く入れちゃ駄目だろ！もう少し蒸らしてから・・・」
「涼！！静かにしなくちゃ駄目だよ！！」
そう言えば涼の家は喫茶店をやっていていて、料理とかすごく美味しいんだよね。
その分こだわりがあるんだろう。
「そこで何をしているんですか？」
あ、気付かれた！？
「すいません、高橋先生。遅刻しちゃっていて。」
「先生、あのバカを殴ってきていいですか？もしくは俺が紅茶を入れなおします！！」
「そんな事言っていないで早く教室へ行きなさい！！西村先生を呼びますよ！？」
「「すいませんでした！！」」
そういって僕たちは最低クラスに駆け出した。
ｓｉｄｅ優子
「・・・・ねえ愛子、今の人達って」

「ん？ああ、吉井君に藤橋くんだね。
二人とも一年生の時から意外と有名人だよ。なに？一目惚れでもしちゃった？」

「いや、そういう訳じゃないわよ。背の高いほうの人に振り分け試験の時に助けられたから」

「ああ、さすが迷子ヒーロー。優子の通学路の方に言ってるとは。」

「・・・迷子ヒーロー？なにそれ」

「良く迷子になって、行く先々で問題解決していくから付けられたあだ名なんだけどね？
だから意外と地域の人に人気が有るし。先生からの評価もまあ、低くは無いらしいよ？
微妙な所らしいけど」

ふーん、今時そんなの居るんだ。けど、おかしいわね。何でそんな善行を積んでる人の評価が微妙なのかしら？

「成績優秀でスポーツも出来て顔も悪くない。だから競争率意外と高いよー？」

「だからそんなんじゃないってば。愛子はそういう話好きね？」

「うん、大好きだよ？それにしてもちょっと残念だったかな。」

「何が？」

「藤橋くん、振り分け試験のとき同じ教室だったんだけどさ。姫路

さんって言う子が倒れちゃった時にちょうど遅刻してきたんだよね。
だから無得点扱いでＦクラスだろうなーって。
試験まじめに受けてれば間違いなくＡクラスだったと思うよ？」

「ふーん」

「あ、そうだ。藤橋くんってお家で喫茶店やってるって言うから、
今日言ってみようよ。」

喫茶店か、お金有ったかしら？
まあ、どっちにしても御礼は言った方が良いから好都合かもね。

「じゃあ一緒に行きましょう」

「うん」

ｓｉｄｅ藤橋
さて、Ａクラスから逃げて来て、やってきましたＦクラス。
なんか明久がちょっと悩んだ顔をしてすぐに明るくなる。
単純って言うのは良いもんだな。
さて、たぶんＦクラスって事は代表は十中八九あいつだろう。
どうせ入ったら「このウジ虫野郎！！」とか言って来るに違いない。
そうしたらどうしてくれようか。
俺の独自のルートから探った情報を元に決定したのは。

「すいません、ちょっと送れちゃいましたっ♪」

「早く座れ、このウジ虫野郎共」
「貴様の情報を霧島に売りつけてやる。」

「すいませんっした～～～～～～！！！！」

「え、え？なに、何なの？ねえ涼！何を言ったらあの雄二がこんなに成っちゃうの！？」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ、何言ってるんだ。俺はホンのチョットした情報を善意（復讐心）である人に売ろうとしただけさ！」

「お前の情報はどこから来ているんだ。俺はお前にも話した覚えは無いぞ！？」

「ヒント１、俺のうちは喫茶店の他にも商売をしている。
ヒント２、ある人が良くある男の情報を買っていく。
ヒント３、最近ではその人は超常連さん。」

「お前か、お前なのか！！俺の合鍵をあいつに渡したのは！！」

「いやいや、準備できないことは無いけどな。お前の周りで簡単に渡しそうな人が居ないか考えてみようか？」

「お袋か～～～～～～～！！！」

ああ、面白い。やっぱ雄二はイジラレキャラが似合っているよ。

「で、雄二何やってんの？」

明久が話しかけている。一年の頃からこの三人と康太、秀吉は割と仲がいいからな。

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた。」
「先生の代わりって、雄二が？なんで？」
「どうせ代表なんだろ？雄二」
「ああ、そうだ。それよりも、やっぱり試験間に合わなかったのか？」
「ああ、まあ良いや。面白そうな奴らかたまってるし。あんま後悔はしてないよ。」
「まあいい、好都合だ。お前が居るんだったら色々と作戦が建て易い。」
「それにしても・・・・流石はＦクラスだね。」
確かに畳に卓袱台ってのはな。まあ良いや。適当な場所に座ろう。
先生来たみたいだし。
「えーと、席についてもらえますか？ＨＲを始めますので」
この人が担任なのか。
・・・このメンバーにこんな覇気の無い人で抑えられんのか？
まあいいか
「はい、わかりました」
「うーっす」
「失礼しました」

そう返事してから適当に席につく。

「えー、おはようございます。二年Ｆ組担任の福原　慎です。よろしくお願いします」

それにしても酷い設備だ。チョークすらないみたいだ。しかもあの教卓。ちょっとした衝撃で崩れ去るな。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出てください。」

・・・不備を申し出ろっても、相当のことじゃない限り取り合わないと思うんだがな。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

「あ～、はい。我慢してください」

ほれ見たことか。

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています。」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください。」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

よくまあそんなにポンポンと問題が出てくるもんだな、おい

「必要な物があれば極力自分で調達するようにしてください。

では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人から

お願いします。」

先生の指示を受け最初の生徒が立ち上がる。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

結構前から気になっていたんだが何で爺言葉なんだ？
そう言えば振り分け試験の時秀吉だったのかな？
後で聞いてみよう。

「と、言うわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

微笑を浮かべて自己紹介を終える秀吉。
・・・明久、だらしない顔するな。友人として恥ずかしくなる。
つ～か、周りの人間もだろ。秀吉は男だぞ！？

「・・・・・・・・土屋康太」

康太か。ホント俺の知り合いばっかりだ。
そういえば、男ばっかりだな。
まあ流石にこんな所まで落ちてくる女子は少ないか。
まあ俺は色恋沙汰にはあんま興味ねーから良いけどな。

「――――です。海外育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きは苦手です。」

む、今度はあいつか。まああいつは女子だが仕方が無い。
本当に読み書きが出来ないから。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は――

――」

それにしてもドイツか。ハム、ソーセージ、チーズなんかもあったな。
今度取り寄せて料理して出してみるか。
そうなると試食会になるな、明久は言わなくても飛んでくるだろうけど。

「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

む、流石にそれは無いだろう島田
また一年間俺が明久の助けてと言うサインにいちいち答えなきゃならない。
え、ほっとけって？無理だな、そういう性分なんだ。

「はろはろー」

明久に向かって手を振っている。

「あぅ。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

今さっき趣味が自分を殴る事と言われて、よろしく出来るとは思えないが。

「――――です。よろしく」

次は明久か。
・・・なんか嫌な予感がする。

（おい、雄二耳、塞いでおけ。なんか嫌なものが聞こえてきそうだ）
（おう？解った。）

『ダァァーーリィーーン！！』

・・・嫌な予感がずばり的中した。
明久のバカめ。大方、「ダーリンと呼んでくださいね♪」とか言ったんだろう。

「――失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします。」

つーか、テンションたけーなこのクラス。
おっと、次は俺か。

「藤橋涼斗だ。家で喫茶店をやってるからぜひ来てくれ。紅茶一杯くらいはサービスしてやろう。」

『おい、あいつ』『ああ、あいつ、あれだよな』『そうそう、何であいつここにいんだ？』
『迷子ヒーローｗｗｗ』

「よし、一番最後に言ったやつ。この世の全てを恨んで死ぬが良い！！
最期の言葉すら聞かずに殺してやる！！！」

俺は愛用のブーメランを懐から取り出し飛び掛ろうとするが

「ちょっ！落ち着いてってば！！何を今更呼ばれただけで怒るのさ！！」

「ええい！止めるな明久！！幾らお前の情報が売れ筋だからと言ってここで止めたら八つ裂きにすんぞ！」

「え、こわっ！？って言うか、何今一瞬不吉な言葉が聞こえたんだけど！？」

「ああ、すまない。大事な友達（情報商品）に俺はなんて酷いことを」

「ねえ、すごい！言ってることはまともなのに裏で思っている事が手に取るように解るよ！？」

まあ冗談だけどな・・・半分くらいは
その後も名前を繰り返す単純でつまらない作業が続く

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

『えっ？』

お、来たよ。俺がここに送られてんのにあいつがここに来ないのは変だからな。
・・・なんか、もう寝ていいかな？

「何不貞寝しようとしてんだよ。」

「うるさい、ギャルゲ男」

「何だその呼び方は！！」

「だって美人のヤンデレ幼馴染に求婚されるって。どんなギャルゲ？」

「くっ、貴様！つーか、ヤンデレって解るなら情報売らないでくれ！！」

「机の二番目の引き出しが二重底になってるよね？どこの新世界の神のなりそこね？」

「お前、ホントどっから情報仕入れてんだよ。」

俺達がこんな会話をしていると周りから変な言い訳が聞こえてきた。
ちっ、俺なんかテスト自体受けてねーのに
そう思っていると姫路がこっち側の席に着いた。

「き、緊張しましたぁ～・・・・」

明久が声をかけようとしている。
しかしそれをさえぎるように雄二が話しかける。

「あのさ、姫――「姫路」

おお、なんと言う恨みの形相

「は、はいっ。何ですか？えーっと・・・」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む

「あ、はい。よろしくお願いします。」

「ところで、もう体調は大丈夫なのか？」

「あ、それは僕も気になる。」

「よ、吉井君！？」

ああ、そう言えば姫路は明久のことが・・・
まあどうでも良いや。
さて、俺は眠くなったから寝るとするか。

俺の意識が落ちようとする中で微かに見えたのは、明久と雄二が教室を出て行くところだった。

まあ良いや。俺は眠い、今日運悪く5時に目覚しが誤作動して寝不足なんだ。
では、お休み。

第三問「魔王降臨」

【問　以下の英文を訳しなさい。】

『Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ　ｈａｄ　ｕｓｅｄ　ｒｅｇｕｌａｒｌｙ.』

姫路　瑞樹の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』

藤橋　涼斗の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強してますね。

土屋　康太の答え

『これは　』

教師のコメント

訳せたのはＴｈｉｓだけですか。

吉井　明久の答え

『☆●◆▽「♪＊×　』

教師のコメント
できれば地球上の言語で。

---

side明久

『大ありじゃぁっ！！』

大きな声が響いた。
そして起きてしまった、いや目覚めてしまった。
・・・・魔王が。

「・・・・誰だ、俺の安眠を妨害する奴は。」

「おい！？落ち着け！！！と言うかなぜ寝ているんだ！」

「るせえっ！！全員血祭りじゃボケェ！！！」

これはやばい！！早く避難を！！

「秀吉、姫路さん、島田さん！！急いで逃げるんだ！！！！！」

・・・・・文章には出来ないので音声と想像だけでご覧ください・・・・

「行くぞ！！」

「くっ！全員かたまるな。三人ずつで固まって移動して涼がかたまりを攻撃してる間に他の隊は涼を抑えろ！！」

「おんどりゃあ！！」

バキイッ！！ゴキャン！！メキッ！！

「「「ギャゴバア！？」」」

「今だ！抑えろ！！」

『『『ウオオオオオオオ！！』』』

「あ〝あ〝！？一対多数だからってなめんじゃねえ！！」

ビュッ！！

『ぎゃあ！？』『な、なんだ！！グボァ！？』『ぶ、ブーメラン！？薄いプラスチックで出来たブーメランがギャブッ！！？？』『『『ウワアアアアアアアアアア！？！？！？！？！？！』』』

ヒュッ！

カカカカンッ！！

「このカッター捌きは、ムッツリーニィィィィィィ！！！」

「・・・・・ここで死ぬわけには行かない。」

「康太！俺がやる！！援護任せた！」

「こいや！悪鬼羅刹がどないなもんじゃい！！！」

「「うおおおおおおおおおおおお！！！」」

・・・・・・・

「むう、相変わらずすごいのう。あの人数を圧倒しておるぞ。」

「寝起きで機嫌が悪い状態だからってムッツリーニと雄二、二人の相手をするとは。」

「・・・藤橋はまともだと思ってたのに。」

「す、すごいですね」

「ん？島田さん、涼は意外とまともだよ？寝てる時に無理に起こさなければ。」

「確かに、雄二の悪戯から明久を庇っておるのも涼じゃな」

「そうだよ。僕の味方してくれるからね。食事で困ってる時もたまに店で料理食べさせてくれるし。」

「お主の食生活が偏りすぎておるのじゃ。」

そう言って秀吉は顔を少ししかめる。

何でさ、ちゃんと塩とか砂糖食べているのに。

「おい、終わったぞ。」

「・・・・死ぬかと思った。」

「あれ、涼はどうしたんだい？」

「何とか俺達が抑えていた所を生き残りが全員で飛び掛ってな。今は簀巻きにしてある。」

教室を覗き込むと縄で縛られている涼斗が転がって居る。
まあ他の生徒達も死屍累々と倒れ伏しているが。

これが第一次魔王降臨である。

「ちっ、それにしても話の途中だっつーのに。
仕方ねえ。おい、ムッツリーニ、なんか手ごろな写真を。」

「・・・・（コクッ）」

ムッツリーニが懐から一枚の写真を出す。
それを雄二が受け取ると

ヒラヒラヒラ

死体（？）の山に向かって落とした。

すると

『『『『『『その写真はまさかぁぁぁぁぁ！？』』』』』』

「・・・・最近の売れ筋。」

それは良く見ると

「む、ワシのこのあいだの劇の時の写真じゃのう？」

お姫様の格好をした秀吉が移っていた。

「おい、少し話を聞いてくれるか？」

『『『『『『『はい、是非とも聞かせてください！！！』』』』』』』

「よし、さっきの話の途中からだったな。」

そう言って、打倒Ａクラスの目標を掲げる。

それはそうと

（さっきの秀吉の写真、何円くらい？）

（・・・・・１枚２００円。ポーズが違うセットは５００円。）

（セットを１ダース貰おう）

（コクッ）

「いいか。このクラスは最強だ！その証明をしてやろう。」

そう言ってこちらを見る。

「康太。チョットこっちに来てくれ。」

「・・・・・（コクッ）」

「こいつは土屋康太。あの有名なムッツリーニだ。

「・・・・・・！！（ブンブン）」

ムッツリーニ、この名前を知らない者はあまり居ないだろう。
その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以って挙げられる。

『ムッツリーニだと・・・・？』
『馬鹿な。ヤツがそうだと言うのか・・・・？』
『そう言えばさっきも藤橋が叫んでいたな』
『それに、この写真を見ろ。こんな写真を取れるのはそこまで居ないだろう。』
『さっきの機敏な動きも覗きなどのために磨き上げられていたと言うのか！？まさしくムッツリーニの名に相応しい。』

「？？？」

姫路さんは解っていない様だ。でも別に知る必要は無いと思う。
・・・・だって『ムッツリスケベ』が語源のあだ名なんてがっかりするだろう。

「姫路のことは説明するまでも無いな。皆だってその力は知っているはずだ。」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している。」

そう、試召戦争はテストの点数がそのまま力になる。
成績優秀な姫路さん以上に強い人はこのFクラスの中では涼位だろう。

『そうだ。俺達には姫路さんが居るんだった。』
『彼女ならAクラスにも引けをとらない』
『ああ、彼女さえいれば何もいらないな』

だれだ、今ドサクサに紛れて姫路さんにラブコールを送ったやつは

「木下秀吉だっている」

秀吉は成績はいまいちだけど、演劇部のホープだとか、双子のお姉さんがAクラスだとか。

『おお・・・・！』
『ああ。アイツ確か、木下優子の・・・』

「もちろん俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ。』
『さっきだってあの藤橋とタメ張ってたし腕っ節もすごいな。』
『坂本って、小学校の頃は神童とか呼ばれてなかったか？』
『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

「しかも皆の知っての通り、迷子ヒーローこと藤橋涼斗だって居る。」

『ああ、すごかった。さっきのは、流石、特攻ブーメラン。』

『ああ、だが敵じゃない限りはこれ以上なく心強いぞ。』
『しかもアイツ成績すごく良かったよな？試験の時も遅刻だったって言うし』
『おいおい、それじゃあ実質Ａクラスレベルが３人も居るのか！？』
すごい、クラスの士気は確実に上がっている。
「それに、吉井明久だっている。」
・・・・シン――――
そして一気に下がった。
くそっ！僕の名前は落ち扱いか！？
「ちょっと雄二！！なんでここで僕の名前を呼ぶんだ！？待ったくそんな必要ないだろう！！！！！！」
『だれだ、あいつ。』
『さあ、聞いたことねえな？』
「ほら、折角ビックネームを挙げてって士気が上がってたのに翳りが見えてきたよ！？
雄二たちと違って僕は普通の人間なんだから、普通の扱いを――って何で睨むのさ！僕のせいじゃないだろ！？」
「このバカはバカの代名詞、観察処分者の称号を持っている。」
なんなんだこいつは、僕を辱めて殺したいのか？
「だけどこいつは教師の雑用なんかで物に触れられる様になってい

る。
まあその分痛みのフィードバックがあるが、それを差し引いてもあまる操作の技術がある。」
「な！？もう復活したのか、涼。しかもちゃっかりと縄抜けまでしてやがる。」
ありがとう、涼。本当に君はいい奴だ。
『そうか、アイツは俺たちより長く召喚獣を使っているからその分操作がうまいって事か』
『おい、なんかいける気がしてきたぞ！？』
「そうだ！このクラスは間違いなく最強だ！！全員筆（ペン）を執れ！Ａクラスへの下克上だぁ！！」
『うおおーーっ！！』
「まずＡクラス打倒の足がかりとしてＤを落とす！明久っ！宣戦布告の使者として大役を果たして来い！！」
「・・・下位勢力の使者ってたいてい酷い目にあうよね？」
「大丈夫だ。俺もついていくから。」
「涼、それなら安心だ。よーし、行って来るよ！」
・・・・
「さて、皆、耳を澄ましとけ、面白いもんが聞けるぞ？」

・・・・・

『貴様らぁ！！俺に喧嘩売るとはいい度胸じゃねえか！！５００倍返しだぜぇ！！！！』

『『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！？！？！？！？！？！？』』

・・・

（（（（敵じゃなくて本当に良かった！！））））

第四問「喫茶店？」（訂正）

【問　１１月１日は何の記念日でしょう。知っている物を一つで良いので答えなさい。
また、その理由も書きましょう。】

明久・雄二・康太・秀吉の答え
『紅茶の日』

教師のコメント
驚きです。何で知っているんでしょう。理由は・・・・

『理由：涼の喫茶店で紅茶が安くなるので印象に残っていた。』

少しでも感心してしまった自分に腹が立ちます。

ｓｉｄｅ優子
色々あってやってきた喫茶店。
今居るのは私と愛子、それに代表だ。
しかし、ここに住んでいるなら学校に行くのに何であの道を通っていたのかしら？

「優子、入ろうよ。」

「あ、ええ。」

カランコロン♪

「何だとこのアホ！！」

「うるさいぞ、明久（バカ）の癖に」

「今すんごく失礼じゃなかった！？」

何か喧嘩している二人組が居た。

「いらっしゃい。すいません、うるさくて。おい、雄二、嫁さんが来たぞ？」

「む、姉上。なにゆえここに」

「げ、翔子！？」

・・・・なんでこんなに騒がしいのかしら？

「三名様ですね？ご迷惑おかけしてすみません。お詫びにケーキを一つ無料にさしていただきます。

・・・・・霧島さんは雄二をプレゼントしましょう。」

「なに！？おい、涼！！テメェ！」

「・・・・ありがとう」

「の、のわ、ちょ待て翔子！ぐ、ぎゃあああああ！？」

「どう言う事さ！雄二に霧島さんが好意を抱いてるなんて！？」」

「・・・・・異端審問会を設立する必要がある。」

なにこれ。

「こちらにどうぞ、お客様。」

「えっと、はい」

「う、うん」

・

・　・　・　・

「こちらがメニューになります。先ほど言いましたとおり大変ご迷惑をおかけてしまっているのでケーキ一品をサービスさせていただきます。」

「別に良いのにそんな事、それよりさ、敬語なんてやめて普通にしゃべってよ。

僕はＡクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から７６・５６・７９、特技はパンチラで、好きな食べ物はシュークリームだよ。気軽に愛子って呼んでね？」

ちょ、ちょっと！？スリーサイズってなに教えてんの！？しかも特技！！

『・・・・・っ！？』（ブシャアアアアアアアアアア！！）

『む、ムッツリーニ！？どうしたのじゃ？しっかりするのじゃ！！』

「ははは、シュークリームですか。ではご注文もそれでよろしいですか？」

すごい、まったく表情を崩さない。

秀吉みたいね。

「うーん、手強いねえ、じゃあ僕はシュークリームで！後敬語は無しね？」

「・・・ああ、解った。俺は涼斗、藤橋　涼斗だ。涼って呼ばれてるからそう呼んでくれてかまわない。よろしくな？」

「うん、よろしく。ほら優子も挨拶」

「あ、えっと、木下　優子です。よろしく」

「・・・・・？」

ん？どうしたんだろう。

「秀吉に姉ちゃんなんて居たのか。そう言えばそんなこといってたな・・・

ん？って言うことは振り分け試験の時に会ったのは君か？」

秀吉と一緒に居るのに私の事知らないなんて・・・・

でも

「あ、はい。たぶんそうです。あの時はありがとうございました。」

「いやいや、たまたま通りかかっただけだったし。困ってる人は見

過ごせない性分なんだよ。」

「いえ、そんな折角助けて頂いたのに御礼をしないなんて出来ませんから。」

『むう、姉上、家と外ではやっぱり違うのう。存分に猫をかぶっておるな。』

ピキッ！

くっ！落ち着くのよ。後でじっくりと言い聞かせれば！！

「私も優子って呼んでくれてかまわないわ。」

「そうか、じゃあ優子。ケーキ何が良い？」

・・・・なんか、ちょっとてれるわね。

男の子に下の名前で呼ばれるなんてほとんどなかったし。

「えっと、じゃあイチゴのショートケーキ。」

「はいよ。じゃあちょっと待っててくれ。」

そういうと厨房と思われる方に歩いていった。

「それにしても喫茶店と言うよりレストランみたいだよね？しっかりとした食べ物も有るみたいだし。」

そう言えば喫茶店と言うには些かメニューが違う気がする。

「まあ、ここは学校の帰りがけに学生とかも来るから。今日はあんまり来ないだろうけどな？
はい、シュークリームとショートケーキ、お待ちどうさま。」
いつの間にか涼斗くんが来ていた。
「美味しそう。」
「いただきまーす。」
一口食べてみる。
ケーキやクリーム自体あまり甘すぎず、イチゴの自然な甘みが口に広がる。
「・・・・おいしい。」
「はは、ありがとな。」
「ほんとに美味しいよ。涼斗君が作ってるの？」
「まあな。オヤジの残したレシピ基にして作ってる。」
「へ～、すごいね。」
「はは、ありがと。おっと、明久達にもなんか持ってかねーと。あ、これ紅茶。御代は気にすんな。今日は大サービスってことで」
「え！？わ、わるいわよ！」
「そうだよ。そのくらいちゃんと払うよ？」

「いいのいいの、どうせ明久達にも作るつもりだったんだし。」
そう言って歩いていってしまった。
「まあ、気にするでない姉上。涼はお人好しなんじゃ。」
「確かに優しいよね～」
「・・・それはそうと、秀吉？」
「む、何じゃ？姉上」
「誰が猫をかぶりまくってるって？」
「何をいっとるんじゃ？姉上に決まって、あ、姉上！？その関節はそっちに曲がらなあああああ！」
「・・・まあ、確かに優しいわね／／／／／」
「む、どうしたのじゃ、姉上？顔が少し赤いぞ、あ、あ、ちょ、姉上関節はそっちにも曲がらないあああああ！！」
・・・・あ、赤くなんてなってないわよね。
ちょっ、ちょっとだけ暑くてそうなっただけなんだから。
そうよ、もしこれがそういう反応だとしたらこれは
「優子、一目惚れ？」
「っ！？そ、そんな訳無いじゃない。わ、私はそういうのはしない

のよ！！
もっと、その、そう！好きになるならもっと順序をもって好きになるわ！！」

「・・・・・・優子、必死になったると余計怪しい。」

「ひゃあっ！だ、代表！？」

「もっとも、アイツのこと好きになるやつが多くない訳じゃないから。別に変と言うわけじゃないがな。」

「Fクラス代表の坂本君。」

「・・・・涼の写真は売れ行きが良い。特に女子」

「親友の命を散らすことになるかも知れないなんて！！」

「嫉妬で殺そうとする奴は親友とはよばん。
・・・・しかし、そうか、姉上にもやっと春が。父上と母上にでも話そうかのう？
それと呼び方は涼ではなく？義兄上？か？」

「な、なあ、なにを。」

「・・・・皆で何話してんだ？って、おわ！？優子、顔が真っ赤だぞ？熱でもあんのか？」

そういうと私の額に額を当ててきて・・・・・っ！？／／／／／

バタッ

「へ？おい、優子！？」

「あ～、ちょっとからかい過ぎたかな？」

「愛子、何をしたんだ？」

「まあまあ、気にしないで。」

この時居たメンバーが誰もが思ったこと、それは・・・・

この二人、面白くなりそうだ！

この一言に尽きたと言う。

第四問「喫茶店？」（訂正）（後書き）

工藤愛子のスリーサイズが違うのはしばらくすれば理由がわかります。

第五問「VS．Dクラス」

【問　以下の問いに答えなさい。】

『（1）４ｓｉｎＸ＋３ｃｏｓ３Ｘ＝２の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するＸの値を一つ答えなさい。』

『（2）ｓｉｎ（Ａ＋Ｂ）と等しい式を示すのは次のどれか、？～？の中から選びなさい。

？ｓｉｎＡ＋ｃｏｓＢ　？ｓｉｎＡ－ｃｏｓＢ

？ｓｉｎＡｃｏｓＢ　？ｓｉｎＡｃｏｓＢ＋ｃｏｓＡｓｉｎＢ』

姫路　瑞希の答え

『（1）Ｘ＝π／６』

『（2）？』

教師のコメント

そうですね。角度を『。』ではなく『π』で書いてありますし、完璧です。

土屋　康太の答え

『（1）Ｘ＝およそ３』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井　明久の答え

『（2）およそ？』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

藤橋　涼斗

『（１）Ｘ＝およそπ／６』

『（２）およそ？』

教師のコメント

こんなに短期間の間に２人目を見るとは思いませんでした。

と言うかなぜわざわざ自分から間違えに行くのですか？

ｓｉｄｅ明久

「吉井！木下たちがＤクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らしながら駆けてきたのは同じ部隊に配属された島田さん。

こうして改めて見ると、背は高くて脚も綺麗なのに、どこか女性としての魅力に欠ける。

一体何が足りないんだろう。

「ああ、むｎムガグ！？」

「明久、そう言う事を口に出すから関節技を決められるんだよ」

あ、危なかった。危うく声に出してしまうところだった！

「あ、ありがと。涼」

「気にすんな。それより、ほれ、試召戦争真っ最中なんだから集中しろ。」

さて、僕は部隊長として戦場の雰囲気を感じ取ろう。
耳を澄ませて、前線部隊の戦闘の様子を聞き取るんだ。

『さぁ来い！負け犬が！』
『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！』
『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、
たっぷりと指導してやるからな』
『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』
『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう』
『お、鬼だ！誰か、助けっ――――イヤァァ――――（バタン、ガチャ）』

「西村先生、それはもはや洗脳なんじゃないか？つーか、自分で『仕立て上げる』って言っちゃってるし。」

うん、涼の言うとおりだ。まあ、試召戦争の雰囲気はだいたいわかった。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、なに？作戦？何て伝えんの？」

ここで僕が出すべき指示はただ一つ。

「全員現状維持、何人かは突撃して前線部隊の特に消耗した奴を入れ替え。
その後に残り全員で突撃、ってのが妥当だな。」
「うわっ！？何言ってんの！？涼！ここは撤退でしょ。」
何でそう、好戦的なんだ。
「藤橋、前線部隊が後退を開始したぞ！」
「よし、今から俺の部隊から五人選出し、突撃だ。」
「「おう！！」」
うう、僕も部隊長なんだけど・・・
「ねえ、島田さん。ここは後退した方がよくない？」
「確かにその方が良いと思うけど」
「よし、僕達の部隊だけでも退避だ！」
しかし、本陣に居たはずのの横田君が来ていた。
「どうしたんだい？横田君」
「代表より伝令があります」
雄二から？一体なんだろう。

「『逃げたらコロス』」

「全員突撃しろぉーっ！」

「あ、おい！ちょっと待て、明久！」

気が付いたら戦場に全力でダッシュしていた。
涼が止めているけれどそんなもん気にしてられない！
べ、別に雄二が怖いからとかじゃない。
そう、決してそんなんじゃない。
と、前方からこちらに向かって走ってくる美少女を発見。

「明久、援護に来てくれたんじゃな！」

ああなんだ。秀吉じゃないか。なんていうか、いつ見ても可愛い・・・・・。

「秀吉、大丈夫？」

「うむ、戦死は免れておる。じゃが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい」

「そうなの？召喚獣の様子は？」

「もうかなりヘロヘロじゃな。これ以上の戦闘は無理じゃ」

「おい、明久！一人で突っ込んでいて立ち止まるな！
あと秀吉、無理はせず補給試験を受けにいけ。」

「む、義兄上、解ったのじゃ。」

そう言って秀吉が走っていく。それにしても・・・

「なんか最近秀吉の呼び方が変なんだけどなぜ？あとなにケータイいじっているんだ？」

「フフフ、なンでもナイＹＯ、ただムッツリーニに異端審問会をヒらくようイヲオネガイしただけＳＡ」

「・・・・明久が壊れた。って言うか異端審問会？誰が異端だって言うんだ？」

「まあ、そのあたりは気にしないで。よし、行こう！！」

「？？？？」

フフフフフフ、ソノウチワカルサ。
イタンシャニハ死ヲ

「・・・・・っ！？なんか寒気が。」

っち、勘の良いやつめ

「それより、涼、試験受け終わったの？」

「あ？ああ、戦力が少ないからって言われたから。ちょっとだけがんばってみた。」

「ふーん、そうだったんだ。」

「姫路はまだ試験中だけどな？さて、行くか！」

そう言って小走りで行ってしまった。

『ああ！！こ、こいつは宣戦布告の時の！？』『ちょ、お前が相手しろよ！！お、俺は手が離せない！』『ぎゃあああああ！！殺される！！！！』『に、逃げろ！！アイツにかかわると何が起こるかわからないぞ！！』

「・・・・涼は居るだけで影響を及ぼしちゃうんだね？」

あっちで島田さんが女の子と戦っている。

少しヤバ目だ。

「吉井！！ちょっと、見てないで助けて！このままじゃ補習室より危険な所に連れて行かれる！！」

「殺します・・・・。お姉さまと美春の邪魔をする人は全員殺します」

・・・・・

「島田さん、君の事は忘れない！」

「ああっ！吉井！何で戦う前から別れの台詞を！？」

「邪魔者は殺します！」

うわっ！？こっちにきた！？

「吉井、危ない！――――試獣召喚っ（サモン）」

『Ｆクラス　須川　亮　　ＶＳ　　清水　美春
化学　　７６点　　ＶＳ　　４１点　』

須川君、君は救世主だ！ありがとう！！！
清水さんが消耗していて良かった。

「島田、大丈夫か？」

「ええ、助かったわ須川君。補習の鉄じ――西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします！」

「おお、清水か。たっぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに来い」

清水さんはこれで『戦死』の状態になったので補習室へ連行された。

「お、お姉さま！美春は認めませんから！このまま無事に卒業できるなんて思わないでくださいね！」

とても危険な捨て台詞だ。
いろいろな意味で危険な戦いだった。

「吉井」

「島田さん、お疲れ。とりあえず一度戻って化学のテストを受けてくるといいよ」

「吉井」

「さ、須川君、行こう。涼の加勢に行かないとね！」

「吉井ぃっ！」

「は、はいっ！」

「・・・・ウチを見捨てたわね？」

「・・・・記憶にございません」

流石は戦場だ。

殺気がヒシヒシと２つの方向から感じる。

・・・え、二つ？

「吹っ飛ばせぇっ！！！！」

『『『『『うぎゃあああ！！補習室は嫌だぁぁ！！』』』』』

『Ｆクラス　藤橋　涼斗　　ＶＳ　Ｄクラス　多数
化学　　４１７点　　ＶＳ　平均　１０２点』

・・・・何かあそこだけ風が吹き荒れてる。気のせいか？

まあ、それより自分の心配だ。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

すごく居心地が悪い。

「死になさい、吉井明久！試獣召――――」

「誰か！島田さんが錯乱した！本陣に連行してくれ！」

冗談じゃないよ！今補習室に行ったらさっきのおかしな子と席が隣になっちゃうじゃないか！

「島田、落ち着け！吉井隊長は味方だぞ！」

「違うわ！こいつは敵！ウチの最大の敵なの！」

・・・・否定できない。

「す、須川君、後よろしく。僕は涼の所へ行くから。」

「了解」

「こら、放しなさい須川！吉井！絶対に許さない！！殺してやるんだからぁーーーっ！」

うう、怖い怖い！けどこれで命の危機は去った！！

「お前、後でどうせ教室で会うんだからその場しのぎじゃん。」

前言撤回！どうやって迫り来る命の危険を退けよう！？

「まあ、良い。戦いも今の所は上手くいっているな。」

「よし、とにかく秀吉たちが補給している間、前線を維持するんだ！一歩も進ませないように！！」

「おっしゃ、もうひとがんばりすっか！」

第六問「明久、お前の死は無駄にしない！！」

【問　今、注目している人を答えなさい。また理由も添えてみてください】

藤橋　涼斗の答え
『坂本雄二』
『理由：あのリーダーシップと言うのか、カリスマ性は目を見張る物がある。』

教師のコメント
確かにそうですね。それが決して良いほうに進まないのが彼ですが・・・

土屋　康太の答え
『藤橋　涼斗、吉井　明久』
『被写ｔ・・・・親友』

教師のコメント
・・・・あ、はい、そうですか。

吉井　明久の答え
『木下　秀吉』
『異性とし～～～～～～～～』

教師のコメント
紙が破けていて、しかもこのアンケートが終わった時に君は気絶していたのですか？

坂本　雄二の答え
『霧島　翔子』
『結婚相手』

教師のコメント
明らかに筆跡が違うし、そもそも坂本君は保健室で何故か寝込んでいたはずでは？

ｓｉｄｅ涼斗
俺は今最前線で相手を食い止めている。
「お前ら、どんだけいやがんだ！もう何人しとめたのかわからんぞ！？」
『相手は確実に弱ってるぞ！どんどん、押して行け！』
『『『おおおおおおおおおお』』』
ちっ、確かに少しずつだが点数は減ってきている。
『藤橋　涼斗　化学　３４２点』
くそ、どうにもこの召喚獣の操作のコツがつかめん。
『Ｆクラスめ、明らかに時間稼ぎが目的だ！』
『何を待っているんだ！？』
それはもうそろそろすれば・・・

『大変だ！斥候からＦクラスに世界史の田中が呼び出されたって報告が！』

よし、これで少しは動揺を誘えるか？

「吉井、Ｄクラスは数学の木内を連れ出したみたいだ」

・・・・・ふむ、ここは撤退したい所だが。

何としてでも抑えておきたいポイントでもある。

「～～～よろしく」

む、明久に何か策があるようだ。

乗っかってみるとしよう。

「１対１にすんなよ！！」

「そうだよ！なるべくコンビネーションを重視するんだ！」

つーかお前も戦えよ！？

・

・・・・

・

ピンポンパンポーン≪連絡いたします≫

あ？放送？この声は須川か。
ってことはこれが作戦・・・
≪船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています。≫
なん、だと・・・・
≪生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです≫
「明久ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！何処でどう間違えてそんな選択をしてしまったんだああ！！！！
あれか！？雄二たちの悪戯をもっと食い止めてればこんなことに成らなかったのか！？
それとも俺たちがバカバカ言い過ぎたからなのか！？
今からでも遅くはないと思うから戻ってきてくれぇぇぇぇっ！！」
「り、涼！？ち、違う！これは須川くんが勝手に！！」
「吉井隊長・・・・アンタぁ男だよ！」
「ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて！」
くそう、本気で明久にどう接して良いのかわからなくなってきた。
「涼！！！！そんな悩まないでよ！？僕の意思じゃないから！！」
『おい、聞いたか今の放送』
『ああ。Ｆクラスの連中、本気で勝ちにきてるぞ』
『あの仲間の取り乱しっぷりから見ても本気の決死の覚悟だったんだな』

『あんなに確固たる意思を持っている奴らに勝てるのか・・・・？』

「くそっ、明久の命を懸けた一世一代の大勝負。無駄にすんじゃねぇぇぇぇ！！！！！」

『『『『おおおおおおおおおおお』』』』』

くっ！明久、すまない！！

「行けぇぇぇ！！」

「須川ぁぁあああああああああっっ！」

明久が何か叫んでいるけど振り向かない！

決して、決して振り向いちゃいけないんだ！！

第七問「勝利っ！！」（前書き）

短いです

第七問「勝利っ！！」

ｓｉｄｅ涼斗

結果から言ってやろう・・・

！！！！！！！！！！！！勝った～～～～！！！！！！！！！！！！！！！！！

と、言うわけで帰宅中。

まあ、Ｄクラスの設備獲らなかったのは少し不満だが

ふふふ、それにしてもやったぜ。

ナイス姫路。

そして明久。

・・・・死ぬな・・・・

「涼！？なんで僕のことをそんなに哀れみのこもった温かい眼で見つめるの！？」

「明日は補給テスト」

「うん、そうだね。」

「一時間目は数学」

「う、うん。それがどうかしたの？」

む、雄二は気が付いたようだ

「船越先生は何の教科の先生？」

「す、数学だね。」

「お前に今日あった出来事」

ダラダラダラダラダラダラ（激汗）

「お前はもう、死んだも同然だ。」

「どっどどどどど、どうしよう！！！！！」

「誰かを紹介したらどうだ？」

「う、うん。そうだね。」

おお、すごい。目が泳いでる。つーか黒目が横線に見えるくらい高速移動をしてる。

「それにしても明久。目的はＡクラスなんだ。勉強、少しはしてくれよ？」

「うっ、解ってるよ。教科書を寝る前にでも読むさ、って、あれ？」

「どうしたんだ？」

俺が話しかけてみる。

「教科書忘れちゃったみたいだ。」

「いや、重さとかで気付けよ！」

「ちょっと取ってくる。」

そして明久は学校へと引き返し始めた。

「じゃあ、俺も家の喫茶店やんなくちゃいけないんで」

「おう、じゃあな」

「ああ、また明日」

こうした初めての戦争は勝利に終わった。

第八問「再び喫茶店」

ｓｉｄｅ涼斗

「さて、優子と愛子が居るのは、まあ百歩譲って良いとしてもだ。なにお前は涙目で紅茶なんぞがぶ飲みしてんだ？」

「うう、だって今日良いことがまったくと言っていいほどないと言うか、不幸と言うか・・・」

こうなるとめんどくさいんだよな。

「何があったんだ？聞いてやろう。」

「実は・・・・」

～説明中～

「ふむ、で、お前はそのラブレターが雄二宛の物ではないかと思っている訳か。」

「うん」

「・・・・バカだな。救いようもないほどのバカだな。」

「な、なにを～！！」

うるせぇな、ここ店の中だぞ？幸い居るのは優子たちだけだけど。

「いつ姫路がそれが雄二宛の物だって言ったんだよ。

しかも雄二には霧島が居るだろう。」

「うう～、でもさぁ。」

「ああ、はいはい。今日は何か食わしてやるから機嫌直して勉強しろよ？」

「ホント！！！やった～！！」

「はぁ、うるさくてすまんな？」

「いやいや、いいよ～。聞いてる限りでは面白いし。優子は涼斗君が見れてれば良さそうだし？」

「な、何言ってるのよ！？／／／／／」

「ま、ゆっくりしていってくれよ？明久、何が食いたいんだ？」

「カレーライス！！」

「はいはいっと」

今日も平和だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9178o/

バカとヒーローと召喚獣

2011年1月7日10時54分発行